

## 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが 学校における規範意識と逸脱行為に及ぼす影響

石田 靖彦\* 丹村 明寿香\*\*

\*学校教育講座 (心理学)

\*\*知立市役所

## Moderator Effects of Students' Group Structure and Their Relationship to Group Members on Their Social Rules and Their Socially Delinquent Behavior in School

Yasuhiko ISHIDA\* and Asuka NIMURA\*\*

\*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Chiryu Municipal Government, Chiryu 472-8666, Japan

### 問題と目的

近年、若者の問題行動が大きな注目を集めている。総務庁によれば、平成5年以降主要刑法犯少年が増加しており、青少年による薬物乱用、凶悪・粗暴な非行、いじめ・暴力行為、性の逸脱行為等問題が深刻化している(総務庁, 2000)。問題行動の増加は学校現場でも認められ、若者の規範意識の低下が指摘されている。学校現場における問題行動に関する調査によれば、授業中の居眠りや勝手に席を離れること、遅刻、ずる休み、掃除当番などのサボり、先生に対する反抗や口答えといった問題行動は小学生よりも中学生で多く、しかも平成18年度は平成11年度よりも増加していることが報告されている(内閣府, 2007)。また暴力行為についても、平成18年度から21年度にかけて小中学校で増加していることが報告されている(文部科学省, 2010)。

このような問題行動に影響する要因については、さまざまなものが指摘されてきた。田中(1991)は、児童の規範意識の構造とその関連要因について検討し、しつけの量の多さは規範意識の高さと正の関連があり、しつけの量が多い家庭の児童のほうが規範意識も高いという結果を見出した。一方、友人や仲間集団からの影響も指摘されている(総務庁, 1999; 鈴木・鈴木・原田・井口, 1996)。小保方・無藤(2005)は、中学生の非行傾向行為の規定要因について検討し、年齢の低いときには非行傾向行為に与える親の影響が大きい、中学生の非行傾向行為には友人が大きな影響を及ぼしていることを明らかにしている。

これら友人や仲間からの影響は逸脱行動や非行行為

に焦点が当てられており、規範意識を直接扱ったものではない。しかし多くの時間や体験を共有する青年期の友人同士は、相手の感じ方や考え方を参照しあい、影響を及ぼし合っていることが指摘されている(Kandel, 1986; 朴・出口・吉田, 2004; 吉澤・吉田, 2010)。したがって、規範意識においても友人や仲間からの影響を受けていると考えられる。

ところで、学校現場における問題行動や規範意識を問題にする場合には、彼らの所属集団に注意を向ける必要がある。学級内の友人や仲間集団に関する研究では、小学校高学年頃から行動をともにする相手が限定されるようになり、学級内には少人数で構成される固定化された仲間集団が形成されるようになることが指摘されている(井森, 1997; 井上, 1992)。実際、中学生の大半は、学級において特定の仲間集団に所属しており、学校での多くの活動をこの仲間集団とともにに行っていることが報告されている(石田, 2002; 石田・小島, 2009)。つまり、中学生では個々の友人からの影響よりも、彼らがどのような集団に所属しているのかという仲間集団からの影響がより大きいと考えられる。

ただし仲間集団からの影響を受けるといっても、すべての生徒が同じように影響を受けるわけではない。仲間からの影響を受けて自身の規範意識を変化させる生徒もいれば、影響を受けにくい生徒もいるだろう。本研究では、このような仲間集団からの影響を左右する調整要因として、仲間集団との関わりに着目する。石田・小島(2009)は、中学生における学級内の仲間集団との関わりについて検討し、仲間集団との関わりとして「仲間集団外への開放性」、「仲間集団に

対する信頼感]、「仲間集団からの拒否不安」という3つの因子を見出した。この研究に即して考えると、仲間集団外への開放性が高い場合には、自身の所属する仲間集団からの影響は小さいと考えられるが、仲間集団に対する信頼感や拒否不安が高い場合には仲間集団からの影響が大きく、仲間とより類似した規範意識を持つようになると考えられる。

また石田・小島(2009)では、どのような仲間集団においてどのような関わりが顕著になるのかについても検討している。それによれば、リーダーとフォロワーが分かれた階層性の高い集団ほど仲間に対する信頼感が低く仲間に対する拒否不安が高いこと、仲間集団以外の成員を受け入れないという閉鎖性の高い集団ほど集団外の生徒との交流(仲間集団外への開放性)が低いこと、まとまりのある凝集性の高い集団ほど仲間に対する信頼感が高いことが見出されている。つまり、規範意識における仲間集団からの影響は、その生徒の仲間集団との関わりによって左右されるとともに、その生徒の仲間集団との関わりはその仲間集団がどのような特徴を持っているかという仲間集団の特徴によって左右されると考えられる。

本研究では、仲間集団の特徴と仲間集団との関わりがそれぞれどのような影響を及ぼし合っているのかについて相関分析を用いて検討する。そして個人の規範意識と仲間の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響について、男女差や仲間集団の特徴や仲間集団との関わりを考慮に入れて検討する。

## 方 法

**調査対象者** 中学1年生178名、2年生172名の計350名に質問紙調査を行った。データに無回答があった2名を除いた348名(男子175名、女子173名)を分析の対象とした。

**調査手続き** 下記の5つの内容に関する質問紙調査を学級単位で集団実施した。

### (1) 所属する仲間集団の有無と構成人数

「あなたは、学校で一緒に教室移動したり休み時間に一緒にいるような決まった友人グループがありますか」という質問に対し「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。所属する仲間集団がある人については、さらに仲間集団の構成人数の回答を求めた。

### (2) 仲間集団の特徴

石田・小島(2009)で作成された仲間集団の特徴尺度を使用した。この尺度は、石田・吉田(1999)の学級構造の認知尺度や黒川・三島・吉田(2006)の個人の集団透過性尺度などを参考にして作成されたもので18項目から成る。評定は、「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」の5件法であった。

### (3) 仲間集団との関わり

石田・小島(2009)で作成された仲間集団との関わり尺度を追加削除や加筆修正して計22項目から成る尺度を作成した。この尺度は、榎本(1999)の友だちに対する感情項目、落合・佐藤(1996)や長沼・落合(1998)の友だちとのつきあい方尺度を参考にして作成されたもので、評定は、「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」の5件法であった。

### (4) 生徒個人の規範意識

朴・出口・吉田(2004)の個人の規範意識尺度を中学校の教員の意見を踏まえて修正して使用した。計12項目で構成され各項目について、「全然悪くないと思う」から「とても悪いと思う」の4件法で評定させた。

### (5) 仲間集団の規範意識の認知

個人の規範意識と同じ12項目を教示文を代えて使用した。具体的には、「クラスの中にいるあなたのグループの人たちのことについて質問します。以下の項目について、グループの人たちの多くがどのように考えていると思いますか。当てはまるところに○をつけて下さい。」と教示した。評定は、「全然悪くないと考えていると思う」から「とても悪いと考えていると思う」の4件法であった。

### (6) 生徒の逸脱行為の頻度

個人の規範意識と仲間の規範意識で用いた項目について、個人がその行為を行った頻度を過去3ヶ月に限定して「たくさんした」「ときどきした」「あまりしなかった」「まったくしなかった」の4件法で評定させた。行為頻度の下位尺度は、個人の規範意識と仲間の規範意識と同じ下位尺度に設定した。

## 結 果

### 1. 尺度の検討

仲間集団の特徴、仲間集団との関わり方、個人の規範意識、仲間の規範意識の各尺度について、因子分析を用いて尺度構成を行った。

#### (1) 仲間集団の特徴

18項目について最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況は、4.5, 2.4, 1.9, 0.9...であり、3因子解を採用してPromax回転を行った。その結果、石田・小島(2009)の結果と同様に、「仲間集団の閉鎖性」、「仲間集団の階層性」、「仲間集団の凝集性」を表す3つの因子が抽出された(Appendix 1)。そこで当該因子にのみ絶対値で.35以上の因子負荷量を持つという基準で下位尺度を作成した。各尺度の内的整合性は、「閉鎖性(7項目)」で $\alpha=.81$ 、「階層性(5項目)」で $\alpha=.70$ 、「凝集性(3項目)」で $\alpha=.64$ であった。

#### (2) 仲間集団との関わり

22項目について最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況は、5.4, 4.5, 1.4, 1.2, 0.9...であ

り、4因子解を採用してPromax回転を行った。結果はAppendix 2に示した。

第1因子は、他の人から評価されるのを気にしているという項目に負荷量が高かったので「評価懸念」と命名した。第2因子は、仲間集団のみんなを信用し、ありのままの自分を見せることができるという項目に負荷量が高かったので「信頼安心」と命名した。第3因子は、仲間集団のみんなと一緒にいたい、一人は嫌だというような項目に負荷量が高かったので「親和志向」と命名した。第4因子は、本当は違うことがやりたくても、仲間集団のもみんなに合わせるとい項目に負荷量が高かったので「同調志向」と命名した。

当該因子にのみに絶対値で.35以上の因子負荷量を持つという基準で下位尺度を作成した。各尺度の内的整合性は、「評価懸念(5項目)」で $\alpha=.84$ 、「信頼安心(5項目)」で $\alpha=.81$ 、「親和志向(5項目)」で $\alpha=.75$ 、「同調志向(2項目)」で $\alpha=.63$ であった。

### (3) 個人と仲間の規範意識

個人の規範意識、仲間の規範意識については、別々に最尤法による因子分析を行った。個人の規範意識の固有値は、5.1, 1.5, 1.2, 0.8...で、仲間の規範意識の固有値は、5.4, 1.4, 1.1, 0.8...であった。いずれも3因子解を採用してPromax回転を行ったところ、ほぼ同様の因子が抽出された。個人の規範意識と仲間の規範意識の認知における因子分析の結果はAppendix 3に示した。

第1因子は、人を一方的にいじめるというような項目の負荷が高いため、「いたずら・からかい」に関する規範意識と解釈した。第2因子は、人と付き合う上での基本的なマナーを守らないという項目の因子負荷が高かったため「対人ルール違反」に関する規範意識と解釈した。第3因子は、学校の規則に反するような項目の因子負荷が高かったため「校則違反」に関する規範意識と解釈した。

下位尺度の構成は、個人の規範意識と仲間の規範意識で同じ下位尺度になるように、下位尺度ごと3項目を選定した。各尺度の内的整合性は、「いたずら・からかい」は個人で $\alpha=.81$ 、仲間で $\alpha=.83$ 、「対人ルール違反」は個人で $\alpha=.69$ 、仲間で $\alpha=.76$ 、「校則違反」は個人で $\alpha=.80$ 、仲間で $\alpha=.80$ であった。

## 2. 仲間集団の規模、仲間集団の特徴および仲間集団との関わり方における男女差

仲間集団に所属している生徒の割合と仲間集団の人数を算出した。仲間集団への所属の有無については348名中7名(男子3名、女子4名)が仲間集団を持っていなかった。言い換えると98.0%の生徒は集団に所属していた。

仲間集団を持たない7名を除外した341名を対象として仲間集団の平均値を算出した。その結果、男

Table 1 仲間集団の特徴および仲間集団との関わりにおける男女別の平均値と標準偏差

	男子 (n=170)	女子 (n=171)	t値
仲間集団の特徴			
閉鎖性	2.12 (.77)	2.39 (.79)	3.22**
階層性	2.60 (.84)	2.25 (.74)	4.11***
凝集性	4.02 (.82)	3.97 (.85)	ns
仲間集団との関わり			
評価懸念	2.50 (1.00)	2.96 (1.03)	4.20***
信頼安心	3.38 (.82)	3.50 (.90)	ns
親和志向	3.65 (.78)	3.96 (.81)	3.56***
同調志向	2.58 (1.01)	2.58 (.93)	ns

\*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

子の平均は7.83名( $SD=4.71$ )、女子の平均は4.24名( $SD=1.87$ )であり、男子の仲間集団は女子の仲間集団にくらべて有意に大きいことが示された( $t(220.17)=9.22, p<.001$ )。

仲間集団の特徴および仲間集団との関わりにおける男女別の平均値はTable 1に示した。t検定の結果、「閉鎖性」( $t(339)=3.22, p<.01$ )と「階層性」( $t(339)=4.11, p<.001$ )で男女差が認められ、女子の集団は男子の集団よりも閉鎖性が高く、逆に男子の集団は女子の集団よりも階層性が高いことが示された。

仲間集団との関わり方については、「評価懸念」( $t(339)=4.20, p<.001$ )と「親和志向」( $t(339)=3.56, p<.001$ )で男女差が認められ、女子は男子よりも仲間の評価を気にすると同時に、仲間と一緒にいたいという親和志向も高いことが示された。

仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連については、男女別に相関係数により検討した。結果をTable 2に示す。

Table 2 仲間集団との特徴と仲間集団との関わりとの男女別相関

	閉鎖性	階層性	凝集性
〈男子〉			
評価懸念	.31***	.34***	-.27***
信頼安心	-.03	-.08	.45***
親和志向	.10	-.09	.16*
同調志向	.32***	.33***	-.07
〈女子〉			
評価懸念	.14 <sup>†</sup>	.32***	-.21**
信頼安心	-.11	-.36***	.55***
親和志向	-.01	-.11	.20**
同調志向	.18*	.29***	-.20**

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , <sup>†</sup> $p<.10$

集団の閉鎖性と階層性については、評価懸念、同調志向との間にそれぞれ正の相関が認められ、閉鎖性や階層性の高い集団に所属している生徒ほど、仲間からの評価を気にしたり、仲間に合わせようとする傾向が強いことが示された。また女子では階層性と信頼安心との間に負の相関が認められ、階層性の高いほど仲間に対する信頼感や安心感が低いことが示された。

集団の凝集性については、評価懸念との間に負の相関、信頼安心および同調志向との間に正の相関が認められ、凝集性の高い集団に所属している生徒ほど評価懸念が低く、信頼や安心感が高く、仲間に対する親和志向も高いことが示された。また女子では凝集性と同調志向に低い負の相関が認められ、凝集性の高い集団に所属している生徒はあまりその仲間に合わせようとは思わないことが示された。

### 3. 個人の規範意識と仲間の規範意識の違い

個人と仲間の規範意識については、各規範意識の内容ごとに性別×主体（個人か仲間）の2要因分散分析を行った。結果をTable 3に示す。

主体の主効果については、いずれの規範意識でも有意な効果が認められ（いたずら・からかい： $F(1,339)=142.91$ ,  $p<.001$ ；対人ルール違反： $F(1,339)=77.73$ ,  $p<.001$ ；校則違反： $F(1,339)=28.83$ ,  $p<.001$ ）、女子は男子にくらべてすべての規範意識で有意に高いことが示された。

性別の主効果については、「対人ルール違反」( $F(1,339)=8.72$ ,  $p<.01$ )と「校則違反」( $F(1,339)=10.94$ ,  $p<.01$ )でそれぞれ有意な効果が認められ、対人ルールでは女子は男子にくらべて規範意識が高く、逆に校則では男子は女子にくらべて規範意識が高いことが示された。さらに「いたずら・からかい」と「対人ルール違反」では性別×主体の交互作用も認められ（いたずら・からかい： $F(1,339)=5.28$ ,  $p<.05$ ；対人ルール違反： $F(1,339)=4.93$ ,  $p<.05$ ）、男子は女子にくらべて個人と仲間の規範意識のズレが大きいことが示された。

### 4. 個人の規範意識と仲間の規範意識の関連

規範意識の下位尺度得点について、まず個人の規範意識と仲間の規範意識の相関係数を男女別に算出した。その結果、「いたずら・からかい」で男子 $r=.51$ 、女子 $r=.59$ 、「対人ルール違反」で男子 $r=.46$ 、女子 $r=.51$ 、「校則違反」で男子 $r=.63$ 、女子 $r=.78$ と、いずれの尺度でも中程度以上の正の相関が示された。また全体的に女子は男子にくらべて相関が高く、女子の仲間集団は男子にくらべてより類似した規範意識をもっていることが明らかとなった。

次に個人と仲間の規範意識の相関が仲間集団との関わりによってどのように異なるのかを検討した。仲間集団との関わりの下位尺度ごとに男女別に平均値を算

Table 3 個人の規範意識と仲間の規範意識の認知における平均値と標準偏差

	男子 (n=170)		女子 (n=171)	
	個人	仲間	個人	仲間
いたずら・からかい	3.32 (.66)	2.80 (.81)	3.27 (.60)	2.92 (.74)
対人ルール違反	3.64 (.58)	3.27 (.78)	3.72 (.43)	3.50 (.56)
校則違反	3.64 (.58)	3.46 (.74)	3.38 (.75)	3.24 (.77)

Table 4 仲間集団との関わり的高低群別の個人と仲間の規範意識間の相関

		評価懸念		信頼安心		親和志向		同調志向	
		低	高	低	高	低	高	低	高
いたずら・からかい	男子	.54***	.50**	.48***	.51***	.44***	.59***	.57***	.41**
	女子	.68***	.52**	.48***	.71***	.48***	.66***	.58***	.61***
対人ルール違反	男子	.67***	.28**	.26*	.61***	.28**	.66***	.46***	.42**
	女子	.55***	.49***	.45***	.59***	.47***	.55***	.62***	.42**
校則違反	男子	.68***	.59***	.62***	.63***	.53***	.74***	.61***	.63***
	女子	.82***	.75***	.70***	.86***	.76***	.81***	.77***	.80***

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ .

出して高低群に分類し、個人の規範意識と仲間集団の規範意識の相関を算出した。結果をTable 4に示す。

全体的な傾向として、評価懸念では高群よりも低群で相関が高く、信頼安心と親和志向では低群よりも高群で相関が高かった。この結果は、仲間に対して評価懸念を感じず安心や信頼感を強く感じて親和的であるほど規範意識における自他の類似性が高いことを意味しており、このような関係ほど仲間からの影響を受けやすいことが示唆される。一方、同調志向では規範意識の種類や男女によって異なる結果で一貫した結果は示されなかった。本研究での同調志向の項目は、仲間に合わせようとするかどうかを問うもので、積極的に同調しようとしているのか嫌々ながら同調せざるを得ないのかといった同調に対する姿勢や意図については弁別できていない。このことが一貫した結果が示されなかったことに影響しているのかもしれない。

### 5. 個人の規範意識と仲間の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響

規範逸脱行為の頻度を基準変数とし、その逸脱行為に関連する個人の規範意識と仲間の規範意識を従属変数とする重回帰分析を行った。結果をFigure 1~3に示す。

逸脱行為に及ぼす個人と仲間の規範意識の影響については、どの逸脱行為でも個人の規範意識が仲間の規範意識よりも強く影響していることが示された。同様の結果は、朴・出口・吉田(2004)でも示されており、学校におけるそれぞれの逸脱行為は、仲間集団がどのような規範意識を有しているかということよりも、自分がどう思うかという自分自身の規範意識に基づい

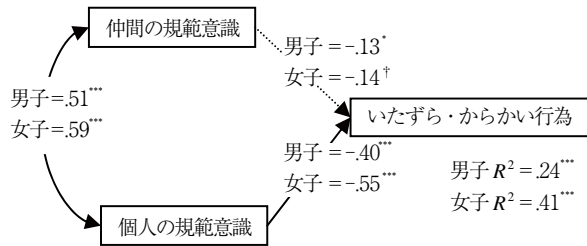


Figure 1 個人と仲間の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響 (いたずら・からかい)

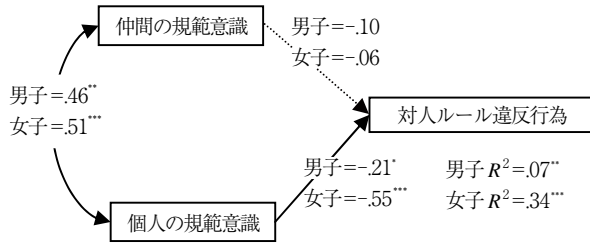


Figure 2 個人と仲間の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響 (対人ルール違反)

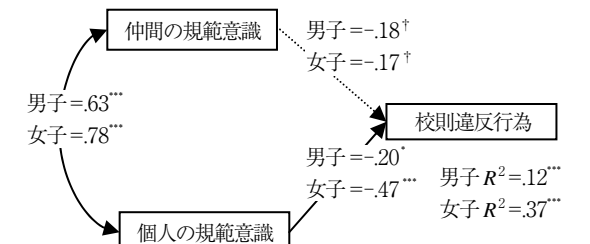


Figure 3 個人と仲間の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響 (校則違反行為)

て行われているといえるだろう。また男女の違いについては、女子は男子にくらべて個人の規範意識と逸脱行為との負の相関が強く、女子は男子にくらべて自分自身の規範意識に基づいて行為を行う傾向が強いことが示された。一方、先述した個人の規範意識と仲間の規範意識との相関分析の結果では、男子よりも女子で相関が高いことが示されており、女子は男子にくらべて仲間とより類似した規範意識を持っていることが示されていた。これらの結果を総合的に考えると、女子は男子にくらべて規範意識が自分に類似した他者を選択して仲間集団を形成する傾向が強く、また自分の規範意識に基づいて行動する傾向も強いことが示唆される。

### 考 察

本研究では、仲間集団の特徴と仲間集団との関わり方との関連、また個人と仲間の規範意識が逸脱行動に及ぼす影響について検討した。

### 1. 仲間集団の特徴、仲間集団との関わりにおける男女差、および仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連

仲間集団に所属している生徒の割合は男女ともほぼ100%で、ほとんどの中学生が仲間集団に所属していることが示された。

仲間集団の大きさや特徴における男女差については、男子の集団は女子の集団にくらべて大きく階層性が高いこと、一方、女子の集団は男子の集団より閉鎖性が高く、仲間集団との関わりでは、女子は男子よりも仲間の評価を気にすると同時に、仲間と一緒にいたいという親和志向も高いことが明らかとなった。石田・小島 (2009) では、階層性の男女差は示されなかったが、その他の特徴は本研究の結果とほぼ一致した結果を見出している。また楠見 (1986) は中学生の学級内のソシオメトリック構造を分析し、男子は階層性の高い大きな集団を形成する傾向があるのに対し、女子は小規模な閉鎖性の高い集団を形成することを明らかにしている。これらの結果から、現実の構造レベルでも認知レベルでも、男子の仲間集団は女子の仲間集団にくらべて大きく上下関係が強く開放的であること、逆に言えば、女子の仲間集団は小規模で対等平等であるが閉鎖的で、仲間との関わり方も一緒にいたいと思う同時に嫌われないかという不安も高く、非常にアンビバレントであることが窺える。

仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連については、男女とも、集団の閉鎖性や階層性が高い集団ほど生徒の評価懸念や同調志向が高くなることが示された。閉鎖的で外部との交流が少ない集団であるほど、内部の成員の評価は重要な意味をもつだろう。また階層性が高い集団では、リーダーが存在しそのリーダーの意向に合わせなければならないという心理的な圧力が存在するだろう。その結果、閉鎖的な集団や階層的な集団ほど評価懸念や同調志向が高くなったと考えられる。

また女子に限ってではあるが、階層性の高さは信頼安心と負の関係にあり、階層性の高い集団ほど生徒の信頼安心は低いことが示された。石田・吉田 (1999) は、女子は男子にくらべて集団内の上下関係や階層性に敏感で、階層性の認知が学級満足感を低下させることを報告している。女子は対等な関係を指向しリーダー的な存在に対する拒否感が強いために、階層性の上下関係のある集団ほど安心や信頼が低いのではないかと考えられる。

凝集性については、凝集性が高い集団ほど評価懸念は低く、信頼安心や親和志向が高いことが示された。凝集性が高いということは集団内の成員が仲が良く遠慮する必要がないということであり、この結果は納得のいくものである。ただし女子でのみ凝集性と同調傾向に有意な負の相関が示されており、女子の凝集性の

高い集団では、評価懸念を感じず親和志向も高いが、同調志向が低くあまり同調しようとは思っていないことも明らかにされた。この結果は、先述したように、女子の仲間集団におけるアンビバレントな関わりを反映していると考えられる。

## 2. 個人の規範意識と仲間の規範意識における男女差、および自他の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響

いずれの規範意識でも個人の規範意識は仲間の規範意識の認知にくらべて有意に高く、自分自身は仲間よりも高い規範意識を持っていると示された。また男女の違いに関しては、校則に関する規範意識は男子の方が女子よりも高く、対人ルールに関する規範意識は女子の方が高いことが明らかとなった。

個人の規範意識と仲間の規範意識の認知間の関連については、いずれの規範意識でも中程度以上の正の相関が認められ、仲間の規範意識を高く認知している生徒ほど自分自身の規範意識も高く、仲間の規範意識を低く認知している生徒ほど自分自身の規範意識も低いことが示された。また自他の規範意識の相関は男子よりも女子の方が高く、仲間に対する評価懸念が低く、安心感や信頼感が強く、仲間に対して親和的であるほど高いことが明らかとなった。このような自分と仲間の規範意識の相関の高さには、規範意識の類似した相手を選択して仲間集団を形成したという「選択過程」と、仲間からの影響を受けて規範意識が仲間の規範意識に近づいたという「社会化過程」の2つの影響過程が考えられる。石田(2005)は、中学新入生の仲間集団における動機づけ志向性の類似性を縦断的に検討し、女子の友人関係では自分に類似した相手を選択するという選択過程が強く、出会ってから早い時点から類似性の高い仲間集団を形成することを指摘している。この知見を踏まえると、少なくとも女子における自他の類似性の高さには、自分と似た規範意識を持つ相手を選択したという選択過程の影響が強く反映されていると推察される。ただしその一方で、本研究では自他の類似性の高さが仲間に対する関わりによっても異なっており、仲間に対する評価懸念が低く、安心感や信頼感が強く、仲間に対して親和的であるほど規範意識における自他の類似性が高いことも示されていた。この結果は、規範意識に及ぼす仲間集団からの影響がその仲間との関わりによって異なることを示しており、規範意識の類似性の高さには、仲間からの影響を受けて類似したという社会化過程も反映されていることが示唆される。本研究は縦断的な調査ではないため、いずれの影響過程が強いのかを特定することはできない。この点については、縦断的な調査を用いてさらに検討する必要がある。

自他の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響について

は、いずれの逸脱行為でも、仲間の規範意識からの直接的な影響はほとんど認められず、個人の規範意識が強い影響を及ぼしていた。この結果と、個人の規範意識と仲間の規範意識がいずれの行為でも中程度から高い正の相関関係にあるという結果を考え合わせると、逸脱行為に及ぼす仲間集団からの影響は、たとえあったとしても仲間の規範意識の影響を受けて個人の規範意識が変化したというように、個人の規範意識を媒介としたものであると考えられる。また個人の規範意識が逸脱行為に及ぼす影響には男女差があり、いずれの行為でも女子の方が男子よりも高い関連が認められた。つまり、女子は自分自身の規範意識に沿って行動を行っているのに対し、男子は自らの規範意識に関わらず逸脱行為を行ってしまう傾向が女子にくらべて強いということである。男子の逸脱行為がどのような要因によって規定されるのかについては、本研究からはわからない。この点については、今後、検討していく必要がある。また本研究は、自他の規範意識と逸脱行為との関連を検討しただけで、規範意識を高めるためにはどのようにしたらよいかという具体的な方法や対策については検討されていない。朴・出口・吉田(2004)では、クラスの適応感や教師の指導行動が規範意識に及ぼす影響について検討し、生徒の規範意識を高めるには、規範意識そのものを高める指導だけでなく、生徒の適応感を高める指導も併せて行う必要性を指摘している。今後は、このような指導行動との関連についても検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 井森澄江(1997). 仲間関係と発達 井上健治・久保ゆかり(編) 子どもの社会的発達 東京大学出版会 Pp. 50-69.
- 井上健治(1992). 人との関係の拡がり 木下芳子(編) 対人関係と社会性の発達 金子書房 Pp. 3-28.
- 石田靖彦(2002). 面接法を用いた集団構造の把握—ソシオメトリック・データの比較による信頼性・妥当性の検討— 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 51, 93-100.
- 石田靖彦(2005). 中学校の新入生の交友関係の形成過程に関する縦断的研究—動機づけ志向性における類似性の観点から— 東海心理学研究, 1, 39-44.
- 石田靖彦・小島 文(2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連: 仲間集団の形成・所属動機という観点から 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 58, 107-113.
- 石田靖彦・吉田俊和(1999). 学級集団内の交友関係が学級満足度に及ぼす影響(1) —学級構造の認知と集団内地位との関連— 日本教育心理学41回総会発表論文集, 257
- Kandel, D. B. (1986). Processes of peer influence. In R. K. Silbereisen, K. Eyferth, & G. Rudinger (Eds.), *Development as action in context: Problem behavior and normal youth development*. New York: Springer Verlag. Pp. 203-227.
- 小保方晶子・無藤 隆(2005). 親子関係・友人関係・セルフコ

- ントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, **16**, 286-299.
- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和 (2006). 仲間集団から内在化される集団境界の評定 名古屋大学院教育発達科学研究科紀要, **53**, 21-28.
- 楠見幸子 (1986). 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学校モラルに関する研究 教育心理学研究, **34**, 104-110.
- 文部科学省 (2010). 平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方から見た青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 内閣府 (2007). 低年齢少年の生活と意識に関する調査
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあひ方の発達の変化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 朴 賢晶・出口拓彦・吉田俊和 (2004). 個人規範および集団規範に対する意識が個人の行動に及ぼす影響 教育心理学フォーラム・レポート, FR-2004-003.
- 総務庁 (1999). 非行原因に関する総合的研究調査 (第3回)
- 総務庁 (2000). 青少年白書のあらまし-青少年問題の現状と対策-
- 鈴木 護・鈴木真吾・原田 豊・井口由美子 (1996). 自己申告法における中学・高校生の逸脱行為の広がりとその背景要因に関する研究2. 経験された逸脱行為のレベルと社会・心理的要因との関連 科学警察研究所報告(防犯社会編), **37**, 28-39.
- 田中純夫 (1991). 規範意識から見た児童の教室内問題行動 犯罪心理学研究, **29**, 1-16.
- 吉澤寛之・吉田俊和 (2010). 中高生における親友・仲間集団との反社会性の相互影響-社会的情報処理モデルに基づく検討- 実験社会心理学研究, **50**, 103-116.

Appendix 1 「仲間集団の特徴」尺度の因子分析結果 (最尤法, Promax回転後)

	I	II	III
I. 仲間集団の閉鎖性 ( $\alpha = .80$ )			
7. グループ以外の人を仲間に入れてあげないという雰囲気がある	.82	-.03	.02
1. 自分のグループは, グループ以外の人を受け付けない雰囲気がある	.79	-.06	.11
13. 他のグループの人が自分のグループに入ってくることを嫌がる人がいる	.63	.03	.05
4. グループの人たちは, いつもグループ内の人とだけ遊んでいる	.62	-.02	.13
10. 自分のグループの人は, 他のグループの人と仲良くしていない	.57	.13	-.17
16. グループ以外の人とみんなよく遊んでいる	-.51	.11	.13
12. グループ内の友だちは別であるという雰囲気がある	.39	.07	.13
II. 仲間集団の階層性 ( $\alpha = .70$ )			
2. グループには, 中心的な存在がいる	-.01	.66	.23
8. グループで何かを決めるときは, 提案する人がいつも決まっていて, みんなはそれに従っている	.03	.64	-.02
11. グループの中で, 意見を言う人と言わない人が分かれている	-.09	.59	-.18
14. グループ内に上下関係がある	.11	.49	-.19
17. グループの中には, みんなについていくだけの人がいる	-.03	.47	-.09
III. 仲間集団の凝集性 ( $\alpha = .64$ )			
6. グループの中みんなは仲が良い	.03	-.13	.71
3. グループの団結力は強い	-.02	.06	.68
15. グループには, 誰にも遠慮することなく, 言いたいことを言える雰囲気がある	.08	-.09	.44
(残余項目)			
5. グループには, みんなを引っ張って行く人がいる	-.06	.59	.43
9. グループの中で孤立している人がいる	.18	.37	-.39
18. グループのみんなと一緒に遊んだり, 活動したりすることが多い	.26	.02	.33
	因子間相関 I	.49	-.17
	II		-.01

Appendix 2 「仲間集団との関わり」尺度の因子分析結果（最尤法, Promax回転後）

項 目	I	II	III	IV
I. 評価懸念 ( $\alpha = .84$ )				
11. 自分がグループのみんなから嫌われていないか気になる	<b>.91</b>	-.05	.16	-.17
10. グループのみんなは、私とはあまり一緒にいたくないのではないかと感じる	<b>.79</b>	-.05	-.13	-.04
4. 自分がグループのみんなにどのように思われているのか気になる	<b>.73</b>	-.08	.24	-.04
15. グループのみんなから嫌われるのではないかと、ビクビクしている	<b>.71</b>	.10	-.15	.16
9. 誰かと一緒にいないと、周囲から浮いているように見られそうで不安だ	<b>.52</b>	.10	.17	.02
II. 信頼安心 ( $\alpha = .81$ )				
6. グループの人になら、なんでも打ち明けられる	.16	<b>.83</b>	-.04	-.03
21. グループのみんなは、私になら何でも打ち明けてくれると思う	-.08	<b>.72</b>	-.18	.08
7. グループのみんなには自分のありのままの姿を見せられる	.07	<b>.66</b>	.06	-.01
8. グループのみんなのことを信用している	.00	<b>.61</b>	.11	-.10
14. グループのみんなは私を裏切らないと思う	-.27	<b>.50</b>	.11	.00
III. 親和志向 ( $\alpha = .75$ )				
17. グループのみんなと離れて一人でいたい	.11	.06	<b>-.67</b>	.17
5. グループから仲間はずれにされるのは絶対に嫌だ	.21	.02	<b>.63</b>	-.07
16. グループのみんなと同じことをしたい	-.07	-.01	<b>.55</b>	.27
13. 一人でいるのは何だか心細い	.27	-.01	<b>.54</b>	-.01
3. 何をしてもグループのみんなと一緒にだと安心する	.08	.18	<b>.50</b>	.13
IV. 同調志向 ( $\alpha = .63$ )				
20. グループのみんなと意見を合わせようとしている	.05	-.04	.01	<b>.68</b>
22. あまりやりたくないことでも、グループのみんなに合わせようと思う	.01	.04	.05	<b>.58</b>
〈残余項目〉				
1. グループと違う行動や考えだと気になる	<b>.33</b>	-.07	.23	.22
2. グループのみんなと何でも同じでいたい	.04	.00	<b>.47</b>	<b>.40</b>
18. グループのみんなとならうまくやっていると	-.30	<b>.36</b>	<b>.37</b>	-.03
19. グループのみんなの顔色ばかりうかがっている	<b>.44</b>	.06	-.22	<b>.44</b>
12. グループのみんなと意見が違ってても、自分の意見を言える	.18	<b>.36</b>	-.06	<b>-.38</b>
因子間相関				
	I	-.28	.19	.52
	II		.54	-.10
	III			.26



Appendix 3 「個人の規範意識」尺度と「仲間集団の規範意識の認知」尺度の因子分析結果（最尤法, promax回転後）

項目	個人			仲間		
	I	II	III	I	II	III
I. いたづら・からかい（個人 $\alpha = .81$ ；仲間 $\alpha = .82$ ）						
4. 友達をからかう	<b>.86</b>	.02	-.04	<b>.98</b>	-.05	-.09
5. 人が嫌がるいたづらをする	<b>.68</b>	.35	-.14	<b>.77</b>	.10	-.04
1. 人の悪口を言う	<b>.67</b>	-.08	.10	<b>.63</b>	-.05	.09
II. 対人ルール違反（個人 $\alpha = .69$ ；仲間 $\alpha = .76$ ）						
6. 人から借りたものを返さない	.13	<b>.73</b>	-.05	-.05	<b>.77</b>	-.04
8. 人との約束を守らない	-.08	<b>.68</b>	.10	.02	<b>.76</b>	-.09
9. 他人の持ち物を勝手に使う	.15	<b>.36</b>	.16	.17	<b>.61</b>	-.04
III. 校則違反（個人 $\alpha = .80$ ；仲間 $\alpha = .80$ ）						
12. 禁止されている髪型（例：染める、パーマをかけるなど）にする	-.12	.05	<b>.86</b>	-.06	-.08	<b>.95</b>
11. 禁止されている制服の着方（例：スカートを短くする、ズボンを下げてはくなど）をする	.26	-.20	<b>.72</b>	.18	-.09	<b>.72</b>
10. 学校に持ってくることを禁止されている物（例：携帯、ゲームなど）を持っていく	-.05	.13	<b>.69</b>	-.06	.29	<b>.55</b>
〈残余項目〉						
7. 授業中に居眠りをしたり、友達とおしゃべりをしたりする	<b>.45</b>	-.11	<b>.41</b>	<b>.51</b>	.06	.18
3. 学校に遅刻する	-.15	<b>.40</b>	<b>.51</b>	-.07	<b>.53</b>	.27
2. 宿題をやらずに学校に行く	.12	.13	<b>.44</b>	.29	<b>.31</b>	.13
因子間相関 I						
II						

(2011年8月31日受理)